そ の 49

あると、今は北原姓と の間に出してあります とを申し上げると、床 なった娘さんにお聞き 折、宿としたお宅で、 井月が飯伊へ来遊した 高森町上市場の中村家 仕事が一段落ついてご とのことであった。 开月句が屏風に貼って 貸料をいただきに参上 白い『家の光』などの (ご当主まさ子氏) ^ した。中村家はかつて していたので、そのこ 去る二月二十四日、 お預かりする資料の きた井月作品ゆえ、い 月印、手紙のそれは「井 の署名は「柳の家」と井 句を、その下に手紙が た。軸の中心上部に俳 ない井月の筆跡であっ 拝見すると、まぎれも ささか興奮気味に広げ 軸仕立てであった。 あった。屏風ではなく 井月句の軸物が上がり 表装されており、俳句 框に出してくださって 挨拶に玄関に伺うと 「拝」と記されていた。 長年頭に描き続けて であった。

が、ご主人は奥座敷に 同然で、体はあかにう す汚れていたであろう 着けていたものはぼろ 食井月の名の通り身に 見る目の高い方で、ケ 不在であったが、人を こ当主は藤雄といわれ 志ら菊と

菊」という酒が、当地 あるが、次の句である。 名や 夏座敷 ふるまわれた「白 さて、肝心の俳句で 柳の家
井月 酒の

埋もれていた井月句と手紙

みをおいて行くので大 の方々は、井月がしら そうを上げ下げした女 ったと語り伝えられて 招じ入れお酒をふるま いるとのことであっ た。ただ、お酒やごち られたものであろうと いが、いずれ当地で作 柄の中には見当たらな 合される前の三十一銘 域の現在の喜久水に統 一句からは、戸障子

変迷惑がったとのこと

しかし、先記した俳

ながら俳論やレベルの がある…」などと言い りな浅い夏の猪口で飲 冷やされた酒を、大ぶ きの井月が、井戸水で る様子が「酒の名や」 していて、しかもこく すか、道理でさらっと すか」「なるほど白菊で ですね、何という酒で みながら「おいしい酒 からほうふつとされ 局い話に興じ合ってい

をあけ広げた風の通る 奥座敷に通された酒好 月顕彰会編『井月全 月のことであった。 る。時に明治十七年六 刊)には次のように記 集』増補改訂版四版 者の手元にある井上井 (平成二十一年九月 この辺については筆 句はこの『井月全集』

ちかるからか 乙部 7 15 ONS

とある。 州の種屋(此五字難 滞留弓有。」 廿九日 曇天村雨 冷麦南ばん焚佳、酒 讀)と同宿す。馳走 先生留守へ投宿。野 市田上市場中村藤雄 廿八日(前略)夕刻 上々。此夜雨降千兩。 (明治十七年六月) の下部に「御笑納被下 めないでいる。二行目 井月句であろうと思 今日まで埋もれていた の文言の墨がうすく読 にある手紙は、はじめ には記載がないので、 …」とありそうなの い、紹介も兼ねてこの 文を記した。 ところで、俳句の下

の部分を省いた断簡か で、表装の都合で初め 状である。 ことを期待している現 みくだすにはほど遠い き方がお訓みくださる 話として記した。 内容ではないが、関係 された資料についての と拝見しているが、訓 が深いので資料渉猟余 状況にあり、しかるべ 以上、この稿は提供

